



ヒーリングの寺院を後にした蓮也・ヘティス一行はプロキオンの案内で、村の繁華街にあるレストランバーに入る。

そこでは、冒険者たちが食事をし、語り合い、酒を酌み交わしている。

建物は古い木造で、雰囲気はしっとりとしていて落ち着きがあり心地が良い。多くの旅人を受け入れてきた趣がある。

ヘティス

「素敵な音楽ね～、なんか懐かしい雰囲気がするわ～」

店内では美しい音楽が奏でられている。その音楽を聴いて旅の疲れを癒しているものもいる。

【楽曲『ドリームジャーニー・人は誰でも夢の旅人』】

https://youtu.be/VWYK_J0fg-4

店に入るとプロキオンが店員と何かを話している。

そして、プロキオンがこちらに戻って来る。

プロキオン

「師匠、一緒にしたいのですが、私も警備のクエストがありますので、これにて失礼させていただきます。宿はこの村は一つしかなく、このレストランバーの隣になります。明日でも明後日でもいいので、剣技を教えていただけると嬉しいです！よろしくお願いします！」

蓮也

「明日は再びヒーリングに行く。まずは、私の腕が使い物にならねば片手剣しか教えられない。だから、その後、気が向いたら教えてやる」

プロキオン

「ありがとうございます！師匠！」

「ヘティスさんも、ありがとうございました！」

ヘティス

「あ、うん。こちらこそ、案内ありがとうね、プロキオンくん」

プロキオンは走ってクエストに向かう。

蓮也たちはレストランバーの中に入る。店員に案内され、丸いテーブルに、蓮也・ヘティス・ヘパイトス・ブーバ・キキが座る。

ヘティス

「あれ？ポコーはどのいったの？」

蓮也

「ポコーは夜はあまり活動的ではない。今頃花の中で寝ているだろう」

ヘティス

「ふーん、変なの～」

ブーバ

「腹減ったわん！」



キキ

「お腹すいたにゃん！」

ヘティス

「アンタたち、さっき何か変なゲテモノを食べてたでしょ？もうお腹すいたの〜？」

「てゆーか、お腹すいたのはこっちのセリフよ〜！もう、ペコペコなんだから！モリモリ食べるわよ〜！」

蓮也

「金に限度がある。量は程々にしろ。それに食い過ぎは健康に悪い。何事も腹八分目だ。いいか。経済と健康、この維持が戦いには重要だ」

ヘティス

「なんか蓮也って合理的過ぎて面白くない。それに私、戦いなんかしないもん。で、食事ってのは、単に栄養を補給するためだけじゃないのよ。楽しい会話をしながら、食事の美味しさを味わって、それが人間としての幸せなのよ〜！」

蓮也

「毎日、食い過ぎて、それで病気になり、金がなくなり、それが幸せというのか」

ヘティス

「も〜、今からせっかく食事を楽しもうってのに、何か興奮めよね〜」

「ねえ、へパ」

「今の蓮也と私の会話を聴いてどう思う？」

へパイトス

「お金持ちはエンゲル係数が低いとされています。そして、腹八分目とすることで生活習慣病を防ぎ、医療費が削減され、健康に働くことができます。また、少食はアンチエイジングにもなりますので、美容面でもプラスです。ですから、蓮也さんの言われることは、とても理に叶っていると言えます」

ヘティス

「何よ！へパまで！どうせあんたには人間の気持ちなんかわかんないわよ！人間の幸せは人間が決めるの！」

「蓮也の頭の中はAIみたいね、ちっとも面白くないわ！」

へパイトス

「ヘティス、ロボットを差別してはいけませんよ」

ヘティス

「もー、うるさい！」

「それにパパはお金の価値観が強すぎるわ。パパの価値観が基礎プログラムに設定されるから、へパからはサイテーな答えしか出てこないのよ！」

ブーバ

「まあまあ、ヘティスわん、抑えて抑えて」

「とりあえず、注文しようわん」

キキ

「お腹すいてると怒りっぽくなるにゃん」

「とりあえず、注文しようにゃん」

ヘティス

「・・・まあ、そうね」

と云うことで、ウェイターを呼ぶ。



ウェイター
「いらっしゃいませ」

ヘティス
「何かオススメのコースとかないの？この人は食べないから、人間二人と動物二匹のコースをお願い」

ウェイター
「お話はプロキオン様に伺っております。こちらで特別メニューを用意しております。お代の方はプロキオン様からいただいておりますので」

ヘティス
「やーん、プロキオンくん、ありがとう～！とても、いい人ね～！」
「蓮也～、あんた、ちゃんと彼にしっかり剣術教えてあげるのよ～！サービスしてあげるのよ～！」

蓮也
「どのようなことがあろうと、誰であっても、教授する内容は同じだ。教授料ももちろん取る」

ヘティス
「こういう接待を受けた時は、少しはサービスするものよ～」

蓮也
「そのようなことは剣術の教授と関係はない。そして、私は誰であろうと平等に対応する。特別扱いはしない」

ヘティス
「もう、あなたと話していると何か疲れるわ！食事、食事よ！」

そうこうしていると、次々に料理が出てくる。そして、メインディッシュが出てきた。ヘティスは蓮也の食べる姿を見て、やはり、左腕の具合がよくないのだなと思った。

ブーバ
「この肉、うまいわん」

キキ
「この肉、うまいにゃん」

ヘティス
「ホント！美味しいわね！このお肉！そしてソースの香りがとてもいいわ～！」

蓮也
「この肉はドラゴンの肉だ。メニューにドラゴンステーキの竜肝ソースと書いてある。気をきかせて、なかなか上等な肉を用意してくれたようだな。プロキオンに感謝することだ」

ヘティス
「ええええええええええ！」
「きょ・・・恐竜のお肉・・・」
「どうしよう・・・」
「食べちゃった・・・」
「なんか具合が悪くなってきた・・・」
「も、もういいわ・・・」

蓮也
「さっき腹一杯食べると言っていたではないか？」

「それに残すのは勿体ないだろ？」
「彼の好意でもあるし、さあ、残さず食べ」

ヘティス

「気分悪いわ・・・。あんたたち・・・私の分も全部食べていいから」

ブーバ

「ドラゴンステーキ、美味いわん」

キキ

「竜肝ソース、素敵にゃん」

と、言うことで食後に飲み物が出された。

ヘティス

「とりあえず、飲み物でお口直しよ・・・」

「一応、何が入っているか、今度はウエイターさんに聴いたから安心よ」

「レインボーフラワリングティー、七色のお花のフレーバーティーね」

「いい香り～、癒される～。見た目も色とりどりで綺麗～。写真にとって SNS に上げたくなるわ！」

「ところで蓮也、手は治ったの？」

蓮也

「いや、まだ治らないが、少しだけマシになった気がする。まあ、まだ戦闘ではまだ使い物にならんし、日常でもあまり動かすことはできない。明日、また来いと言われているので、行くつもりだ」

ヘティス

「あ、そうなんだ。よかったね。それと、もう一つ聞きたいんだけど」

蓮也

「なんだ？」

ヘティス

「蒼き魔術師って知ってる？」

蓮也

「蒼き魔術師・・・聞いたことがある。あらゆる魔術を使いこなし、軍略優れた伝説の魔術師だ。しかし、その出自・経歴は謎のベールに包まれている。我が祖父・円也王にも仕えたと言う伝説の五行英雄だ。暗黒戦争以降、その姿を消したとされるが」

「ところで、ヘティス、なぜ蒼き魔術師を知っている」

ヘティスはエスメラルダとのいきさつを話した。

ヘティス

「個人情報かもしれないから、エスメラルダさんには内緒ね」

「でね、蒼き魔術師を探し出したいの！」

「そしてね、彼女の想いを解き放ちたいの！」

「何十年越しかのハナツオモイ、素敵でしょ～？」

蓮也

「ハナツオモイ・・・か」



「エスメラルダは我が祖父のことも知っているようであるし、こちらに蒼き魔術師が加われば、私としても心強い。まあ、現在も生存していたら、の話だが。しかし、それなりの高齢だろうが、魔法型なら今も十分戦える」

ヘティス

「蓮也～、あなた戦うことばかり考えているけどさ～、何のために戦っているの？」

蓮也

「ヘティスは何のために生きているのだ？」

ヘティス

「ん～、前にも誰かにそんな質問されたことがあったっけ～？」

「私は、未来の世界にいた時は、ゲームして楽しんだり、動画観たり、VR 楽しんだり、友達と遊んだり、ショッピング行ってお洒落したり、カフェしたり、・・・数えきれないくらい、たくさんあるわ！」

「けど、それって自分の価値観に素直になり、自然に振舞うことだと思うの。そうやって生きていくのが私の人生のコンセプトかな」

蓮也

「私にはヘティスの言っていることの半分も理解できないが、たくさんあることはいいことだな。素直に、自然にというのも悪くないと思う」

ヘティス

「でしょ？たまには褒めてくれるのね。てゆーか、私が聴いているのよ？やっぱり戦うのが楽しいの？そのために戦うの？ちょっとわかんないわ、その感覚」

蓮也

「何のために戦うか・・・か。以前にも同じ質問をされたことがあったな」

(最強の傭兵・スサノオ・・・、今も彼はどこかで戦いに明け暮れているだろうか？)

ヘティス

「へー、そうなんだ」

蓮也

「答えとしては、理想の世界を創造するため、だ」

ヘティス

「理想の世界を創造する・・・」

(なんか意外な答え・・・思っていたほどの戦闘マニアではないのかも)

ヘティスは蓮也が単に無目的に戦っているのではなく、そこに何らかの目的や哲学があると感じたのであった。